賈島という詩人像

―虚と實のあいだ―

益西拉姆

一、はじめに

近人・聞一多（一八九九―一九四六）は、中唐後期の詩人、賈島（七七九―八四三）の受容史に關連して興味深い指摘をしている。すなわち、賈島の沒後、晩唐から五代にかけての一世紀餘りは、賈島の詩が熱狂的に愛好された「賈島の時代」であった、と聞一多は指摘した。また、唐以降、各王朝の末期になると、賈島の詩は決まって愛好され模倣された、とも指摘している。[1]

聞一多のいうように、唐以降近代に至るまで、亡國の音が響き始めると、賈島の詩はしばしば李杜韓白に勝るとも劣らない大きな影響力を及ぼし始め、盛んに祖述された。彼は、唐末から清末に至るまで、折々に熱心な信奉者を生み、その結果、彼らの手を借りて自らの分身を一千年餘の詩歌史のあちこちに出現させたのである。今日、それを「賈島現象」と形容した中國の學者もいる。[2] このような現象の存在は、賈島が際立った個性を備えた唐代詩人の一典型として、時代を超えて認知され、廣範に受け入れられていたことを如實に物語っている。

長期にわたって愛讀された著名詩人のほとんどは、ひとり作品のみならず、詩人としての個性も際立っており、往々にしてそれを印象づけるさまざまな故事逸話をもっている。そして、それらのエピソードは詩人に具象的なイメージを賦與し、讀者と作者、讀者と作品の距離を縮める重要な役回りを演じている場合が少なくない。詩人の故事逸話は、もともと作品の外部に存在するものだが、知らず知らずのうちに作品の內部に潛入し、我々の讀みを左右し操作する魔力をも祕めている。それゆえ、ややもすると、――故事逸話が喚起する具象的イメージを前提とし、そのイメージに沿うようにして各作品を鑑賞する、というような――本末轉倒した鑑賞行爲に、我々を誘引することさえある。

「賈島現象」について思いをめぐらす時、その源である彼の詩の特質を考察することは何にもまして重要であるが、同時に賈島という詩人像を具象化した故事逸話にも相應の注意を拂うべきだと筆者は考える。なぜならば、後述するように、「賈島現象」が初めて發生した時、ほぼ同時に賈島にまつわる故事逸話も誕生しているからである。賈島の故事逸話は、受容史の最初期の段階において、すでにその原型が完成され、受容史の重要な構成要素の一つとなっている。したがって、

北宋以降、賈島の文學を受容する者の腦裏には、作品とともにこれらの故事逸話もすでに不可分の要素として組み込まれていた可能性が高い。今日の我々が「推敲」の故事によって喚起されるイメージを拔きにして賈島を想像することが難しいように、北宋以降の受容者もすでに我々とほぼ似た狀況にあった可能性が高いわけである。

このような觀點から、本稿では、最初の「賈島現象」が發生した、晩唐五代の一世紀餘に焦點を當て、當時の人々が、賈島にいったい何を見出し、どこに共鳴したのか、という問題を、故事逸話の生成を檢討することで明らかにしたい。それは、とりもなおさず、賈島という詩人の實像と虛像とを現存文獻によって可能な限り辨別する過程でもある。

なお、本稿で賈島の詩を引用する場合は、李嘉言『長江集新校』（以下、『新校』と略稱。上海古籍出版社、一九八三年十一月）を底本として用い、齊文榜『賈島集校注』（人民文學出版社、二〇〇一年十一月）や黃鵬『賈島詩集箋注』（巴蜀書社、二〇〇二年六月）等、近年の校注本も參照した。他詩人の引用については、原則として、『全唐詩』（以下、『全』と略稱。中華書局、一九六〇年四月）を用いた。

二、從來の賈島像と近年の新說

今日、我々が賈島という詩人をイメージする時、容易に想起されるのは、次の三要素であろう。

i 還俗僧（法名、無本）

ii 韓門の弟子

iii 不遇の生涯を送った苦吟派の詩人（「推敲」の故事）

最近の工具書類における說明も、おおむね右の三要素を中心として敍述されている。[3]

ところが近年、中國と日本において、右のような從來の賈島像の再考を促す研究が發表された。胡中行「賈島事迹三考」（『鐵道師範學報』一九九四年第二期）と靜永健「賈島『推敲』考」（九州大學『中國文學論集』第二九號、二〇〇〇年十二月）がそれである。

胡氏の論は、右に揭げた第一の要素、すなわち賈島が還俗僧であることを否定したものである。その論據は、おおよそ以下のような五點に集約される。

①賈島が僧侶であったことを傳える文獻三種（『新唐書』『劉賓客嘉話錄』『唐才子傳』）の記載內容がいずれも信用に足るものではない。

②當時、還俗して官に就いた者が多く、そのことに言及するタブーはなかったにも關わらず、唐代賈島の一生に觸れた約六〇首の詩の中に、賈島が還俗したことに言及する作品がまったくない。

③蘇絳の「墓銘」に記載がない。

④賈島の詩の中に、彼が僧侶であった痕跡を見出しがたい。

⑤韓愈と孟郊に無本に送った詩があり、「無本＝賈島」が通說となっているが、三者の經歷を勘案すると、無本と賈島は別人と判斷される。

靜永氏の論は、「推敲」故事の演變過程を辿り、その異同を明らかにし、さらには正史系の史料との齟齬を整理考察した上で、「推敲」の故事が後世の創作である、と結論している。

もし、兩氏の新說のとおり、賈島が還俗僧でなく、「推敲」の故事も作り話ということになれば、從來の賈島像は拔本的な修正を餘儀なくされるであろう。そこで、本稿では、賈島沒後約一五〇年間におけ

る最早期の傳記資料に今一度檢討を加え、各種資料の間に存在する異同の實態を把握し、異同の意味することについて、考察する。

この間に記された賈島關連の資料は、二種類に大別できる。その一は墓銘と正史の記載、他の一は筆記類の記載である。一般論としていえば、前者では歷史記錄としての史實がより多く重んじられ、後者では讀み物としての娯樂性がより多く重んじられる。したがって、記載された事實にも質的な異同が存在する。總じて後者は前者に比べ虛構的要素が大きい。本稿でも、この點に留意し、まずは墓銘と正史の記載を檢討し、しかる後に各種筆記類の記載を檢討することとする。

三、墓銘と正史

賈島の傳記研究において、これまでもっとも信頼されてきた基礎資料は、正史『新唐書』卷一七八の記述（『舊唐書』には傳がない）と、『新唐書』が基礎を置いたと思われる、唐・蘇絳の「唐故司倉參軍賈公墓銘」（以下、「賈公墓銘」と略稱）の二種である。この中、成立年代が最も古い第一次資料が蘇絳の「賈公墓銘」である。「賈公墓銘」の現存テキストは、a賈島の別集『長江集』（明・毛晉汲古閣刊唐人八家詩本、清・席啓寓刊唐詩百名家全集本等）に附載されたもの、b『全唐文』卷七六三所收のもの、の二系統があり、兩者の間に文字の異同がかなりある。ここでは、情報量が相對的に多いaの系統の全文に基づきながら、その要點を記すこととする。なお、紙幅の都合上、原文の引用は割愛する。荒井健氏による譯注が、小川環樹編『唐代の詩人 その傳記』（大修館書店、一九七五年十一月）に收められているので、それを參照されたい。原文は三八四字からなり、四つの段落に分けられる。

第一段落には、賈島の出自が記される。しかし、語られる一族の系譜は極めて簡略で、唐代前期までの墓誌が概ねこの部分を長々と敍述するのと好對照である。注目すべきは、彼の出生に直接關わる兩親や祖父の代のことが一字として記載されていない、という事實である。蘇絳に執筆を依頼したであろう賈島の妻劉氏が、夫の兩親や氏素姓をまったく知らないということは考えられないから、それが記載されなかったのは、彼の一生を顯彰する上で、これらの情報が積極的な意味を持たないと判斷された、ということを意味しよう。それは、彼の一族が貧賤に甘んじた寒門であったことを暗示している。[4] 結局、ここから抽出できる確實な事實は、彼が范陽（現在の北京市）の出身であった、という一事だけである。

第二段落では、彼の經歷が記される。傳記論的に最も重要な部分であるが、やはり極めて粗略な敍述しかない。前半は彼が資質に惠まれ、博識であったこと、五言詩にすぐれ、當時人口に膾炙されたことが記される。後半が彼の官歷を記した部分である。ここには、a賈島が科擧に及第できなかったこと、b誹謗中傷に遭ったこと、c遂州長江（四川省蓬溪縣の西）主簿に任命され赴任したこと、d任期滿了後、普州（四川省安岳縣）司倉參軍へ轉任したこと、の四點が明記されている。

この中で、bからcへの展開が特に大きな謎である。「誹謗中傷に遭う（罹飛謗）」とは具體的にどのような事件であったのかが、何も記されていない。原文では、その直後に「解褐」、すなわち布衣から官になる意の語がつづき、さらに「責授」という語に連續しているため、彼が地方官（長江縣主簿）に就いたことが、あたかも處罰であるかのように記されている。つまり、無官の賈島が、なんらかの嫌疑を

かけられたにもかかわらず、地方官に任命される、という尋常ならざる展開が記されている。しかも、無官であるはずの彼の地方官赴任が左遷であるかのように記述されている點も不合理である。このように、誹謗事件と地方官任命の因果關係がきわめて不明瞭に示されており、原文に脱落があるのではないかとさえ疑われる。ただし、後述するように、『唐摭言』巻十一「無官受黜」の條は、おそらくこの記述を基礎として、左遷の原因となった逸事を「創作」している。

第三段落においては、まず賈島が（貧賤であるにもかかわらず）「諸侯」に厚遇されたこと、性格が「和茂（穏和）」で、むやみに他人の批判を口にしなかったことが記されている。「況んや葷血を食はず、豐骨自ら清く、金偈を念持し、至理を冥收し、浮幻の實莫きを悟り、無生の求むべきを信ずるをや（況不食葷血、豐骨自清、念持金偈、冥收至理、悟浮幻之莫實、信無生之可求）」という條は、賈島が佛教に歸依していたことを窺わせるに足る內容であるが、その出家と還俗については明記されていない。この部分を根據に、彼が佛教を信仰していたと見なすことは十分に可能だが、ここから出家の事實を讀みとることは困難である。なお、『全唐文』所收のテキストには、この條自體が存在しない。この他、彼が書法にも造詣があったことが記され、彼の文學作品が超俗的高踏的で、陶淵明や謝靈運の系譜に連なるものであると述べられる。

第四段落では、彼の死について觸れる。武宗の會昌三年（八四三）の七月二十八日に、任地（遂州長江縣）にて客死したこと、享年が六十五であったこと、死後、轉任の命が屆いたこと、翌年の三月に普州に埋葬されたこと等が記されている。沒年から逆算して、生年は、代宗の大曆十四年（七七九）であったことが分かる。埋葬場所が「安岳縣移風鄉南岡權安里」と明記されているが、『全唐文』では、「普南安泉山」に作る。末尾に、墓銘執筆の經緯と「銘」が記される。著者の蘇絳については、「鄉貢の進士」以外の經歷は分からない。

以上、「賈公墓銘」の內容を整理したが、ここには、出家（還俗）の事實も、「推敲」の故事もまったく記されていない。

つづいて『新唐書』の傳を檢討する。賈島の傳は、巻一七六（列傳一〇一）「韓愈傳」の後に附錄され、それによって「韓門の弟子」であることが强調されている。なお、賈島の他に、孟郊、張籍、皇甫湜、盧仝、劉叉の傳も附載されている。

總字數はわずかに一一七字しかなく、「賈公墓銘」の三分の一以下という短さであるが、にもかかわらず、「賈公墓銘」に記されていない事實が幾つか記されている。

第一に、賈島が初め「无（無）本」という法名の佛僧であったが、洛陽にいた時、韓愈の勸めで還俗して科擧に應じたこと。

第二に、長安滯在中、驢馬に跨り、詩作に夢中になって、京兆尹（長安の長官）が通ることに氣づかず、行列を避けなかったために、罪に問われ拘束されたこと。

第三に、「賈公墓銘」にも記錄された「飛謗」が、文宗の時代（八二七—四〇）の出來事と限定されたこと。

第一の點は、「賈公墓銘」にはまったく言及されていない事實である。あえていえば、「況んや葷血を食はず」以下の條を敷衍したものと見なすこともできるが、前述のとおり、この條だけから彼が僧侶であったことを讀みとるのは困難である。第二の點は、「推敲」の故事に繫がるエピソードであるが、少なくとも韓愈とは無關係のこととして記されている。第三の點、「飛謗」事件が文宗の時代のこととする

と、賈島四十九歳から六十二歳の出來事となる。

『新唐書』で加わった新しいエピソードは、主として蘇絳「賈公墓銘」の空白部分を埋めるものであり、兩者の間に事實關係の大きな矛盾や齟齬があるわけではない。しかし、新たに加わった三點の中、彼が僧侶であったという點や、韓愈との關係、それに作詩に熱中して大官の行列にぶつかったという故事は、賈島の詩人像を左右する大きな要素である。これらは、論理的にいえば、「賈公墓銘」が書かれた唐・會昌四年（八四四）から『新唐書』成書の北宋・嘉祐五年（一〇六〇）までの二世紀餘の間に新たに加えられた事實である。そこで、「賈公墓銘」に見られない新要素の來歴を、可能な限り他の文獻の中から見つけ出してみたい。

四、唐末五代の筆記類に見える賈島故事

賈島の逸話を掲載し、蘇絳の「賈公墓銘」と『新唐書』の間に成立したと見なされる文獻には、以下の三種[5]がある。

A、晩唐・孟棨『本事詩』「怨憤第四」

B、後周・王定保『唐摭言』卷十一「無官受黜」

C、後蜀・何光遠『鑑誡錄』卷八「賈忤旨」

右の三種の他、南宋初の黄朝英『靖康緗素雜記』卷八や胡仔『苕溪漁隱叢話』前集卷十九に引かれる韋絢『劉賓客嘉話錄』にも賈島の故事が見えるが、『劉賓客嘉話錄』の通行本（說郛本、顧氏文房小說本等）には收められておらず、流傳に疑問がのこることから、本稿では考察の對象から外し、別の機會を設けて論ずることとする。

A、本事詩……僖宗の光啓二年（八八六）十一月の自序が冠されているので、晩唐末期の成書である。『本事詩』では、賈島の科擧落第後の詩（『新校』附集「題興化園庭（興化の園庭に題す）」詩／宋末元初・蔡正孫『詩林廣記』前集卷七では、「題裴晉公第（裴晉公の第に題す）」に作る）を採り上げ、その詩を例として彼の人となりが「侮慢不遜」であり、それが終生科擧に及第できなかった理由である、としている。この點は、「賈公墓銘」が彼の性格を「和茂」と記したのと、まったく好對照である。

B、唐摭言……撰者の王定保（八七〇―九四一？）は、光化三年（九〇〇）の進士。『四庫全書總目提要』（卷一四〇、子部小說家類一）によれば、五代後周の顯德元年（九五四）以降の成書とするが、沒年の通說と牴牾する。ある程度の幅をみて十世紀初めから半ばの成立としておくのが妥當であろう。『唐摭言』十五卷は、唐一代の科擧に關わる樣々なエピソードを記錄した書である。この書に賈島が採り上げられたのは、彼が科擧を受驗して終生及第できなかった詩人だからであろう。科擧に落第したことは、彼の詩人としてのイメージにおける重要な要素の一つでもある。『唐摭言』卷十には、韋莊（八四七―九一〇）が、當時、及第できぬまま死去した才子に、進士及第の稱號を贈り、補闕や拾遺の官を追贈すべきだという意見書を上呈したという記事が掲載されているが、その中にも賈島の名は明記されている（「韋莊奏請追贈不及第人近代者（韋莊及第せざる人の近代なる者に追贈せんことを奏請す）」）[6]。この事實も、懷才不遇の詩人としての賈島のイメージが早くから廣く傳わっていたことを證明している。

『唐摭言』では、標題に「無官受黜」とあるように、「無官」でありながら左遷された唐代詩人の例として、賈島を含め三名が採り上げられている。他の二人は盛唐の孟浩然と晩唐の溫庭筠である。すでに確認したように、蘇絳の「賈公墓銘」には、賈島が「無官」でありなが

ら左遷されたと解釈しうる記述が存在した。『唐摭言』の條には、あたかもこの間の謎を解き明かすかのような一節が含まれている。すなわち、賈島が「長江縣尉」に流されたのは、武宗に無禮を働いたためで、それゆえ武宗が一官を與えた上で彼を都から追放したのだ、と記している。

そのほか、『新唐書』の記す京兆尹事件が、實名とともに詳細に語られている。『唐摭言』によれば、賈島がぶつかった京兆尹は、劉栖楚（？―八二七）であった。また、彼が夢中になって構想していたのは、「落葉滿長安（落葉 長安に滿つ）」（『新校』卷五「憶江上吳處士〔江上の吳處士を憶ふ〕」詩の第四句）の對となる句であった。

『新唐書』との大きな異同は、韓愈との關係がまったく記されていないことと賈島が僧侶であったことについて一切觸れていないことである。ただし、武宗は「會昌の排佛」によって著名な皇帝であり、當時、多くの佛僧が還俗させられたから、武宗がここに登場した理由も、賈島がそういう還俗僧の一人であったことを暗示する目的であったかもしれない。

C、鑑誡錄……撰者の何光遠は、生沒年ともに未詳であるが、五代十國・後蜀の廣政年間の初め（九三八）に普州軍事判官の任に在ったことが知られているので、賈島の故事もその在任期に採集したと思われる。そうすると、成書の時期は、『唐摭言』とほぼ同時か、それより幾らか後れる頃と判斷される。

『鑑誡錄』の「賈忤旨」は、總字數一〇五二字からなり、賈島の逸事を今日に傳える唐五代の各種文獻の中で、最も詳細なものである。全文は大きく三つの段落に分けられる。

第一段は、洛陽に上京したばかりの頃、先輩を見下し、科擧受驗生をみな己より劣ると見なした、賈島の傲岸不遜な人となりが、まず記される。その後、我々のよく知る「推敲」の故事が具體的に敍述されている。「推敲」の對象の詩は、「題李凝幽居（李凝の幽居に題す）」（『新校』卷四）である。『鑑誡錄』は、この時ぶつかった京兆尹を韓愈とする。蘇絳「賈公墓銘」には、關連の記述が一切なく、『新唐書』では、驢馬に乘って「京尹」とぶつかったことは記すが、京兆尹の氏名は明らかにされていない。ただし、賈島傳は韓愈の附傳であるから、そこに「京尹」とのみ記された事實は、『新唐書』の撰者がこの京兆尹を韓愈と別人と見なしていた可能性の强いことを示している。そして、『唐摭言』では、劉栖楚とする。

いずれにせよ、賈島と韓愈、そして「推敲」の故事という三者の結びつきは、現存資料では『鑑誡錄』において初めて出現した。なお、韓愈が賈島に贈ったという詩も引用されているが、この詩は韓愈の別集には見えない集外詩「贈賈島（賈島に贈る）」（『全』卷三四五）である。

第二段は、①賈島の「病蟬」詩が、當時の權勢者に憎まれ、一時、京師を追放されたこと、②その後、僧籍に入り、「無本」と稱したこと、③京師に戻り還俗して、鐘樓の側に居住し、宣宗がお忍びで現れるのを待ったが、④逆に宣宗に無禮を働き、長江主簿に流謫されたこと等が記されている。

この四點に卽して、他の文獻との異同を整理する。まず、①「病蟬」詩（『新校』卷六）によって京師より追放された點。これは、蘇絳「賈公墓銘」、『新唐書』を始め全ての文獻に記載がない。あえていえば、「賈公墓銘」、『新唐書』にいう「飛謗」を具體化した箇所と見なしうる。②～③の僧侶となり還俗したという點は、『新唐書』に同樣

の記載が見えるが、『新唐書』では、初め僧侶であったのが、韓愈に勸められて還俗し科擧に臨んだことになっており、僧籍に入った時期も還俗の契機も全く異なっている。③の宣宗に對する非禮については、『唐摭言』に類似の條があるが、『唐摭言』では宣宗ではなく、武宗のこととしている。

『鑑誡錄』の第二段において附加された幾つかの新しい事實の中、特に詳細に敍述されているのは、宣宗と賈島の故事であり、とりわけ宣宗が賈島に與えた「墨制」が引用されている點が注目に値する。しかし、「賈公墓銘」にはむろんのこと、『新唐書』にも關連の記載はまったくない。他書との關係性をあえて讀みとろうとすれば、「賈公墓銘」にある「諸侯 之を待するに賓禮を以てす（諸侯待之以賓禮）」という一節から導き出された故事といえなくもない。なぜ、賈島が「賓禮」でもって待遇されたのかという疑念から發して、實は背景に皇帝の意志が働いていた、とするストーリーである。なお、末尾に引用される「感恩詩」は、「觀冬設上東川楊尚書（冬設を觀、東川の楊尚書に上る）」詩（『新校』卷九）である。

第三段は、主として、最晩年の賈島と、同世代もしくは後輩からみた賈島の晩年の官歷についてである。賈島の最期については、「牛肉を啖ひて疾を得」と記され、杜甫の終焉故事（「牛炙白酒」故事。『新唐書』卷二〇一）を彷彿とさせる。賈島の最期が具體的にどうであったかについては、他の文獻にはまったく見えない。

五、故事の異同

前二節において整理した內容をまとめてみると、別表のようになる。五種の文獻の閒に、かなりの異同が認められるが、全體的な傾向とし

早期の賈島傳記資料における異同表

		「賈公墓銘」	『本事詩』	『唐摭言』	『鑑誡錄』	『新唐書』	cf.『唐詩紀事』	cf.『唐才子傳』
	成書時期	844	886	10世紀前半以降	10世紀半ば以降	1060	12世紀前半	1304
	字　數	384字	84字	141字	1052字	117字		
1	出家と還俗	−	−	−	○	○	○	○
	——出家の時期				中年期以降	青少年期	青少年期	中年期以降
	——還俗の時期				すぐに還俗	壯年期	壯年期	すぐに還俗
	——法名（無本）				○	○	○	○
2	推敲と京兆尹衝突	−	−	○	○	○	○	○
	——京兆尹の氏名			劉栖楚	韓　愈	？	韓愈／劉栖楚	劉栖楚／韓愈
	——推敲した詩			「憶江上吳處士」	「題李凝幽居」	？	「憶江上吳處士」「題李凝幽居」	「題李凝幽居」「憶江上吳處士」
3	詩による誹謗	△	○	−	○	△	○	−
	——詩のタイトル	※「飛謗」とのみ記す	「題興化園庭」		「病　蟬」	※「飛謗」とのみ記す	「病　蟬」	
4	皇帝への非禮	−	−	○	○	−	−	○
	——皇帝の名			武　宗	宣　宗			宣　宗
5	韓愈との關係	−	−	−	○	○	○	○
6	賈島の性格	和　茂	侮慢不遜 苦吟詩人	苦吟詩人	傍若無人 苦吟詩人	苦吟詩人	苦吟詩人	苦吟詩人

て指摘すれば、晩唐〜五代と時代が下るにつれ、盛り込まれる情報が増加し、敍述が詳細になったことが分かる。特に、賈島の詩人像は、五代の頃に具象性を帶び始め、『鑑誡錄』において一應の完成を見た、ということを指摘できよう。そして第二に、エピソードを附加していく形には、主として二通りあることがわかる。

五種の資料の間に、かりに一定の有機的な影響關係があったとすれば、おおよそ以下のような二つの影響關係を指摘できるように思う。一つは、「賈公墓銘」に記載されていない空白部分を埋めるもので、表の1（出家と還俗）と2（推敲と京兆尹衝突）の內容がそれに相當する。他の一つは、「賈公墓銘」における不明瞭部分や不合理な箇所を明瞭化もしくは合理化し、因果關係を具體的に示そうとするもので、表の3（詩による誹謗）と4（皇帝への非禮）がそれに相當する。とりわけ、後者3と4の生成過程が大變興味深い。もし、「賈公墓銘」が全ての淵源であると假定すれば、唐末五代に生まれた故事は次のような理由で創作されたものと想像される。

すなわち、「賈公墓銘」の讀者は自ずと「飛謗」以下の不自然な展開に一連の疑問を抱くことになろう。「飛謗」とは、いったいどういう事件で、なぜ起こったのか。なぜ無官の賈島が處罰されたにもかかわらず地方官に任命されたのか、その彼がなぜ權貴から厚遇されたのか。――このような一連の疑問である。『本事詩』から『鑑誡錄』に至る三種の文獻はそれぞれこの三つの疑問のいずれかに答えている。

まず、『本事詩』は、「飛謗」の具體的內容を記している。『唐摭言』と『鑑誡錄』は、皇帝を登場させることよって、この不自然な展開に合理的な說明を加えている。また、「諸侯」の厚遇も皇帝の配慮によるものという說明が加えられている。また、6に見られる、性格認定の轉換は、1〜4の各要素にリアリティーと合理性を增すために必要な轉換であった、と解釋できる。

次に、本稿冒頭に揭げた、從來の賈島像の三要素に卽して、五種の文獻における異同をもう一度整理しておく。

まず第一に、賈島が還俗僧であった、という點について。右の表の1の欄がこの點に關係するが、「賈公墓銘」をはじめ、成書時期の古い方から三番目まで、この事實は記載されず、『鑑誡錄』にいたって、はじめて記載される。しかも、この點に言及する『鑑誡錄』と『新唐書』の間にも異同が存する。『鑑誡錄』において、賈島はまず科擧合格を目指す書生として登場し、韓愈との出會いを經て、（その後ある事件が發端となり）出家して僧籍に入り、すぐに還俗する、と記されている。一方、『新唐書』では、まず僧侶であった賈島が、韓愈との出會いによって還俗し、科擧合格を目指すという設定になっており、大きく異なっている。

第二の要素、韓愈との關わりについては、表の5がそれに當たる。これも、出家と還俗に同じく、『鑑誡錄』にいたって、はじめて兩者の關係が明記される。

第三の要素、とくに推敲の故事（2參照）について見てみると、故事自體は、すでに『唐摭言』に記載されてはいる。しかし、賈島が驢馬に騎ってぶつかった相手は、劉栖楚と記されている。『鑑誡錄』にいたって、その相手が韓愈に變わる。

以上を整理すると、賈島の沒後、『新唐書』にいたる約二百年間において、成書の時期がほぼ中間に位置する『鑑誡錄』の記載が、のちの賈島像の定着にもっとも大きな意味をもっている、と判斷される。『鑑誡錄』とそれ以前の文獻を比較すると、韓愈のウェイトが高まり、

韓愈が重要な役回りを演じるようになる。賈島が出家した時の「無本」という法名も、『鑑誡錄』にいたって、はじめて記載される。

そこで、次節では、賈島と韓愈の關係に焦點を當て、兩者の關わりを文獻的に跡づけてみたい。

六、韓愈と賈島もしくは韓愈と無本

賈島と韓愈（七六八―八二四）の交遊が實在したことについては、賈島の詩集のなかに、韓愈に贈った詩が五首含まれていることにより、それを確認できる。以下に、五首の詩題を掲げ、あわせて李嘉言の編年（『新校』附錄年譜）を記す。ただし、②については、李嘉言の年譜に言及がないので、黃鵬『賈島詩集箋注』における編年を記した。

①「攜新文詣張籍韓愈途中成（新文を携へ張籍・韓愈に詣る途中に成る）」（『新校』卷二）……李云、元和五年（八一〇）、三十二歲

②「臥疾走筆酬韓愈書問（疾に臥し筆を走らせ韓愈の書問に酬ゆ）」（『新校』卷七）……黃云、元和七年（八一二）、三十四歲

③「寄韓潮州愈（韓潮州愈に寄す）」（『新校』卷九）……李云、元和十四年（八一九）、四十一歲

④「黃子陂上韓吏部（黃子陂にて韓吏部に上る）」（『新校』卷三）……李云、長慶四年（八二四）夏、四十六歲

⑤「和韓吏部泛南溪（韓吏部の南溪に泛かぶに和す）」（『新校』卷九）……李云、長慶四年（八二四）夏、四十六歲

このうち、③～⑤の詩は、韓愈の經歷に照らして、時期が自ずと限定できるので、確實性の高い編年である。①と②の編年に關しては、なお檢討の餘地がのこるが、いずれにしても賈島の別集のなかには、韓愈との交遊の痕跡が確實に殘されているので、兩者に交遊があったことは明らかである。

一方、韓愈の別集には、詩題に賈島の名の見える詩が一首として收められていない。『新唐書』に韓門詩人として略傳が附載された六名（賈島以外には孟郊、張籍、皇甫湜、盧仝、劉叉がいる）のうち、韓愈の別集に、彼が寄贈した作品の收められていないのは、賈島と劉叉の二人だけである。『新唐書』における扱いも、韓愈の別集に名前の見える孟郊以下盧仝までの四名と、賈島・劉叉の二名を區別している。[7] ただし、通說では、以下の二首が賈島に贈った詩と見なされている。

イ、「送無本師歸范陽」（『全』卷三四〇）

ロ、「贈賈島」（『全』卷三四五）

このうち、ロは集外詩で、初出文獻は韋莊の『又玄集』（卷中）である。『又玄集』には、光化三年（九〇〇）の韋莊の序が冠されているので、韓愈の沒後すでに六十年以上經過している。また、北宋の蘇軾は「世俗の無知なる者の託する所（世俗無知者所託）[8]」といい、近人・錢仲聯も「此の絕句の愈が作に非ざること明らかなり（此絕句之非愈作明矣）」（『韓昌黎詩繫年集釋』卷十二「疑僞詩」、上海古籍出版社、一九八四年八月、一二八九頁）と結論する等、後人の假託である可能性が指摘されている詩である。

イの詩は、韓愈のすべての別集に收められ、素姓の確かな作品である。しかし、この詩が賈島に贈った詩となるためには、「無本＝賈島」が證明されなければならない。しかし、これまで檢討してきたように、賈島と無本が結びつけられたのは、賈島の沒後一世紀を過ぎて成立した『鑑誡錄』が最初のことであり、現存文獻ではそれ以前に遡ることはできない。

筆者は「無本＝賈島」説を疑う立場であるが、その理由は主として二つある。まず、韋縠の編『才調集』十巻における編集状況がある。『才調集』では、巻一に賈島の詩を七首収め、巻九に無本の詩二首を収める。[9] この事實は、編者の韋縠が賈島と無本を別人と見なしていたことを暗示している。

韋縠の生平の詳細は分からないが、一説に、後蜀（九三四―六五）に仕え、監察御史となった、とされる（陳振孫『直齋書錄解題』巻十五等）。[10] だが近年、四川成都の東郊において、韋縠の弟夫妻の墓誌が出土し、この新資料に基づき、韋縠が後蜀ではなく、前蜀の監察御史に任じられていた可能性を指摘する新説も提出されている（陳尚君「『才調集』編選者韋縠家世考」）。[11] この新説によれば、『才調集』は前蜀（九〇七―二五）の時代、すなわち十世紀前半の成書となる。『才調集』における編集状況は、『鑑誡錄』の數十年前には、賈島と無本を別人と見なす立場も存在したことを示している。[12]

第二に、イ詩のなかで形容される無本の作風が、一般に認識されている賈島の詩風と距離がある、という點である。

無本於爲文　　無本　文を爲るに於いて
身大不及膽　　身の大いさ　膽に及ばず
吾嘗示之難　　吾　嘗て之に難を示すも
勇往無不敢　　勇往して　敢へてせざるは無し
蛟龍弄角牙　　蛟龍　角牙を弄するも
造次欲手攬　　造次にして手づから攬らんと欲す
……　　……
蜂蟬碎錦纈　　蜂蟬　錦纈　碎き
緣池披菡萏　　緣池　菡萏　披く
芝英擢荒榛　　芝英　荒榛より擢で
孤翮起連茭　　孤翮　連茭より起こる
……　　……

最初の六句は、無本が大膽な構想力をもち、困難な對象をいとも容易く組み伏せ、すぐさまそれを巧みに形容する拔群の表現力を備えていたことを贊美した部分であるが、ここに語られた樣は、後世、「苦吟派」と稱された賈島の像とは、ほど遠い。[13] また、「蜂蟬」以下の四句は無本の詩風を暗示した表現であるが、とくに前半の二句は、寒色系の色彩語を多用し、モノトーンの世界を描くのを得意とする賈島の詩風とかなり異なるといわざるを得ない。

もちろん、次のような反論も成り立つであろう。賈島は韓愈に推挽を乞う立場であるから、彼が韓愈に自作を投じた際、より多く韓愈の價値觀に沿うように、あるいはまた個性よりも客觀的な創作能力の高さを示すことに重點を置いて自作を選別したために、結果的に後世の評とは異なる韓愈の評價を招いたのではないか、というような反論である。その他、推挽を得るために韓愈の前では才氣煥發型の詩人として振る舞っていたのではないか、という反論も想定しうる。さらには、賈島の詩風そのものが後年大きく變化したという可能性を說くこともできよう。

しかし、「賈島＝無本」を證明するものが、賈島の同時代に何一つ存在しない以上、もう一つの可能性を完全に否定することもできないであろう。すなわち、賈島と無本は同一人物ではない、という可能性である。

では、賈島と無本が同一人物ではなかったとすると、兩者はなぜ結びつけられたのであろうか。

筆者は以下のような状況を想定できるのではないか、と考える。

まず、賈島が范陽の出身であり、「無可」という法名の從弟がいたことが、賈島と「范陽の無本」を近づける要素として働いたであろう。そして、賈島が韓愈に贈った詩、②「臥疾走筆酬韓愈書問」のなかに、

願爲出海月　願はくは海を出づる月と爲り
不作歸山雲　山に歸る雲と作らざらん

という句があり、賈島は韓愈に對して、「山に歸る雲」になりたくはない、と思いを綴っていることから、イの「送無本師歸范陽」詩こそが、「山に歸る雲」の賈島を送別した詩である、という見方が生じたのではないか、と推測される。「山」について、我々は二つの含意を想定できる。一つは故郷、もう一つは寺院である。後者は、賈島を還俗僧と見なす時に想起される含意である。また、「雲」も、中唐以降、しばしば禪の境地を象徴する語として用いられたので[14]、「禪僧」や「佛寺」のイメージと結びつきやすい。いずれにしても、韓愈の別集のなかに、賈島に贈られた詩文が存在しないことから、右のような類推によって、兩者が結びつけられたのではないか、と考えられる。

このような立場に立った時、もっとも留意すべきは、賈島と韓愈を何としても結びつけなければならない、とする強い力がその背後に働いている點である。

『新唐書』における扱いの相違にも示されているように、所謂「韓門」詩人の中にも、韓愈との閒柄に親疎の別が認められる。通行の韓愈の別集による限り、長期にわたる親密な交遊が確實に認められるのは、孟郊と張籍の二人だけである。皇甫湜と盧仝は、韓愈が洛陽に滯在した元和年閒の初期に一時的に交遊があったことを確認できるに止まる。賈島と劉叉の二人に至っては、兩者の詩から韓愈との繫がりを確認することはできるものの、韓愈との閒に具體的にどのような交遊がなされていたのかは、ほとんど不明である。

つまり、イの詩が賈島送別の詩となることで、賈島は韓愈に認められた「韓門」詩人としての位置を確立できるようになるのである。さもなければ、賈島の韓愈に對する思いは、ほぼ完全な一方通行となり、「韓門」における立場もはなはだ不安定にならざるを得ない。

それでは、なぜ韓愈と賈島を結びつける力學が生じたのであろうか。筆者は、賈島の沒後、晚唐五代における「賈島現象」に大きなヒントがあると考える。次節において、この問題を解明したい。

七、晚唐五代詩人における賈島

冒頭で掲げたように、聞一多は晚唐五代を「賈島の時代」と稱した。實際に、賈島の沒後、北宋に至るまで（八四三―九六〇）の約一二〇年閒、夥しい數の詩人が賈島に言及し、彼を素材として詩を詠じている。試みに、關連の詩をのこしている詩人の名を『全唐詩』の掲載次序にしたがって列記すると、以下のようになる。

(1)姚合（七八一？―八四六）二首／(2)劉得仁（？―？）斷句／(3)薛能（？―八八〇）一首／(4)李頻（？―八七六）二首／(5)李郢（？―？）一首／(6)李克恭（？―？）一首／(7)鄭谷（八五一？―？）三首／(8)崔塗（八五〇？―？）一首／(9)杜荀鶴（八四六―九〇四）三首／(10)張蠙（？―？）一首／(11)徐夤（？―？）一首／(12)曹松（八三〇？―九〇二？）二首／(13)李洞（？―八九七？）三首／(14)可止（八六〇―九三四）一首／(15)歸仁（？―？）一首／(16)貫休（八三二―九一二）二首／(17)齊己（八六四―九四三）五首

『全唐詩』を一覧しただけで、計十七名の詩人に、三〇首餘の詩がすぐさま見つかる。一例として、杜荀鶴（八四六―九〇四）の「賈島の墓を經（經賈島墓）」詩を以下に掲げる。

謫宦自麻衣　謫宦　麻衣よりし
銜冤至死時　冤みを銜んで死時に至る
山根三尺墓　山根　三尺の墓
人口數聯詩　人口　數聯の詩
仙桂終無分　仙桂　終に分無く
皇天似有私　皇天　私有るに似たり
暗松風雨夜　暗松　風雨の夜
空使老猿悲　空しく老猿をして悲しましむ

この詩のように、賈島の墓を訪ねて詠じたという作例が複數あること（李頻「過長江傷賈島」、鄭谷「長江縣經賈島墓」、李洞「賈島墓」等）は注意されてよい。賈島の墓は「賈公墓銘」に明記されているように「普州安岳」にあった。よって、晩唐五代の詩人たちの多くが混亂の世情の中、蜀に向かったことを示している。一般に「墓銘」は、死者とともに地下に埋められることを常とするので、石に刻まれた「賈公墓銘」を目睹した人はほとんどいないであろうが、「鄉貢の進士」蘇絳の記した原稿が、埋葬地を中心に流布していた可能性は大きい。さらに、今日における賈島の詩人像の確立にもっとも寄與した『鑑誡錄』が、後蜀に仕え、普州に赴任した經歷を有する何光遠によって記された事實をも考慮に入れると、晩唐五代の「賈島現象」發祥の地が東蜀の遂州や普州にあったと見なしてよいかもしれない。この問題については、機會を改めて論じてみたい。

冒頭の二句は、「賈公墓銘」や『唐摭言』に記錄された「無官受黜」の故事を踏まえていよう。杜荀鶴が東蜀を旅した時期は未詳であるが、かりに最晩年のこととしても十世紀の初頭のことである。したがって、『唐摭言』に記錄されるよりも早く、「無官受黜」の故事がすでに巷閒に流布していた可能性を示している。

右に列記した十七名の詩人の詩のなかで、賈島が還俗僧であることに言及した詩は、冒頭で紹介した胡中行氏の指摘のとおり、一首も存在しない。しかし、韓愈との關係に言及した詩は一首だけ存在する。それは、李克恭の「弔賈島（賈島を弔ふ）」詩（『全』卷六六七）である。しかし、李克恭は、『全唐詩』の小傳に、「乾符（八七四―七九）中の擧子」と記されるだけで、まったく經歷が分からない人物であり、詩もこの一首しか傳わらない。しかも、この詩の出典は、ほぼ閒違いなく『鑑誡錄』である。「擧子」（文淵閣四庫全書本では「聖子」に作り、その場合は皇帝の兄弟の意。宋本では「擧子」。）という情報も、『鑑誡錄』に明記されており、詩の中に（賈島の沒後）「未だ四十載を隔てず」という表現があることから、小傳にいう「乾符」という元號が導き出された、と考えられる。韓愈との逸話が初めて掲載される『鑑誡錄』が初出であり、しかもその末尾に、あたかも全文の內容を總括するかのような意味合いで引用されたのがこの詩であるから、その信憑性はかなり低いと見積もるべきであろう。

いずれにせよ、十七名の詩人に三〇首餘の詩は、「賈島現象」が確かに存在したことを證明している。さらに、唐末・李洞（?―八九七?）や南唐・孫晟（?―九五六）の故事は、その現象が行き着いた窮極の形を今日に傳えている。李洞と孫晟は、賈島を尊崇するあまり、彼の像を鑄造したり、肖像畫に描いて禮拜した、という。[15] この兩者の例は

あまりに極端だとしても、晩唐五代における賈島詩の流行は、なぜ發生したのだろうか。

晩唐五代において、貧窮に甘んじた寒士が詩作に全身全靈を傾けたことについては、日中兩國にすでに優れた研究が複數ある。[16] 戰亂の世ともなれば、文の力が及ぶ範圍は平時に比べそもそも限定的になる。さらに、社會の混亂が、文の力を頼りとして社會的な上昇を目指す彼らの出世の機會そのものを、大きく奪ったであろう。そういう出口の見つからぬ閉塞狀況の中で、彼らはふりしぼるように自己の困窮の樣を詩に詠じ、なおかつ詩作に沒頭し苦吟する己の姿を詩のなかで表現した。それらの作例は先行研究に多く引用されており、しかも枚擧に暇がないので本稿では割愛するが、賈島の流行を支えたのは、士大夫階級の低層に喘ぐ寒士たちであった。おそらく、彼らは賈島のなかに、己と同じ體臭を嗅ぎ取ったのであろう。それゆえ、先輩詩人のなかで、悲壯なまでに詩作に打ち込んだ賈島に感情移入し、そこに己の姿を重ね合わせていったのだ、と思われる。こういう切實な思いが、一方で賈島の神格化を生み、また一方で故事逸話を生み出す原動力となったことは想像に難くない。

そして、故事逸話が生成されてゆく過程で、賈島と韓愈が強く結びつけられていった背景にも、彼らの切實な思いが投影されているのではないかと、筆者は考える。

先輩詩人のなかで、賈島ともっとも親密な閒柄にあったのは張籍である。賈島の詩集のなかに彼に贈った詩があるだけでなく、張籍の詩集にも賈島に贈った詩が五首收められており、[17] それらによって、彼らがどのような交遊をしていたかも知ることができる。したがって、もし賈島と先輩詩人という筋立てで故事逸話を構想するのであれば、賈島の相手としては張籍こそがもっとも自然に選ばれて然るべき人物であった。しかし、現實には、賈島と張籍の故事逸話は存在しない。張籍ではなく、韓愈でなければならなかったのは、やはり兩者の社會的地位に由來するであろう。韓愈は吏部侍郎にまで昇った大官であり、張籍はその韓愈の推挽によって官を得たのであるから、兩者の地位の差は歷然としていた。さらに、晩唐五代における文化史的評價も、韓愈は孔孟の道を繼承する正統的儒者として、あるいはまた「大雅の文」を記す古文家として、すでに安定的に高い評價を得ていた。

このように輪郭のはっきりした韓愈との閒に具體的な關わりをもつことによって、賈島は詩人としての具象的なイメージを持つことになり、文學史的にも「韓門弟子」として確かな位置を與えられることになる。そして、賈島が大官・韓愈に見出され、加護を受けるという展開は、晩唐五代の寒士たちの誰もが、己の身に起きて欲しいと希求する願いでもあった。このように、賈島の詩作への共感と、賈島に託した夢と、さらには、せめて賈島と同じぐらいは世に羽ばたきたいとする切實な思いとがない交ぜとなり、それが賈島と韓愈を強く結びつける原動力となったのではないか、と筆者は推論する。

八、おわりに

本稿では、賈島の故事逸話の生成過程に焦點を當て、晩唐五代の賈島現象について論じた。賈島の詩人像における「虛」と「實」という觀點から、本稿で論じた內容を振り返ると、現存資料によって、「實」と確認できる事實は、きわめて僅かしか存在しない。たとえば、もっとも權威があり、後世への影響も多大であった『新唐書』の傳でさえ、そこに記錄されたエピソードは、還俗といい、「推敲」の故事といい、

さらには韓愈との密接な關係といい、どれも立證することの困難な灰色の物語である。むろん、火のない所に煙は立たずの俗諺のとおり、もともとそれに類する事實があったからこそ、このような故事逸話が生まれたのだ、とする立場に立つこともできよう。しかし、少なくともそれと同程度に、これら一連の故事逸話が創作された可能性も存在し、その可能性を全否定することができない以上、それを疑問視する本稿のごとき考察も、賈島の受容史を研究する場合には、必要不可缺なプロセスとなるはずである。本稿では、このような理由から、これらの故事逸話が創作されたものである、という立場に立って、晩唐五代という時代の中に、それを生み出した物語生成の力學を探ってみた。

今日における賈島の詩人イメージは、その大部分が同時代の文獻によって實在を立證することのできない、「虛」に近い事實によって生み出されている。しかし、それらをひとたび晩唐五代という時代文脈の中に置いて考えてみると、少なくともその一つ一つが、不遇な詩人たちの現實を映し出し、彼らの切實な願いを載せていることにも氣づかされる。――彼らの酷薄なる現實と切實なる願いとが一つに凝縮されたもの、それが賈島の故事逸話であり、「賈島現象」であり、かつまた「賈島の時代」なのであった。

注

(1) 聞一多『唐詩雜論』「賈島」(中華書局、國學入門叢書、二〇〇三年六月)。聞一多が指摘したのは、宋末の永嘉四靈、明末の「鍾譚」、すなわち鍾惺と譚元春、および清末の同光派である。このうち、永嘉四靈における賈島の祖述は明確な事實といってよいが、明末と清末の例については、なお詳細な比較研究が待たれる。ただし、「鍾譚」については、陳廣宏『竟陵派研究』(復旦大學出版社、二〇〇六年八月)第八章第二節「關於凄清荒寒的情韻風調」のなかで、聞一多の指摘に對する再檢討がなされており、その妥當性が確認されている(四四二頁)。清末の同光派は、一般に宋詩鼓吹派といわれるが、實情はそう單純ではなく、彼らが追求した詩歌の風格も多樣であった。同光體詩人の領袖の一人、陳衍が『石遺室詩話』卷三(人民文學出版社校點本、四一頁)において、道光年間以後の詩學を二派に分けそれぞれの特徴を概括しているが、そのうち「清蒼幽峭」一派の源流を列記したなかに、賈島の名を擧げており、聞一多の指摘を裏づけることができる。

(2) 周裕鍇『中國禪宗與詩歌』第三章「三 賈島時代」(上海人民出版社、一九九二年七月)參照。

(3) たとえば、小川環樹『唐詩概說』(岩波書店、中國詩人選集別卷、一九五八年九月。のち、岩波文庫)、松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』(大修館書店、一九八七年十一月)、周祖謨主編『中國文學家大辭典 唐五代卷』(中華書局、一九九二年九月)、松浦友久編『漢詩の事典』(大修館書店、一九九九年一月)等。

(4) もう一つの可能性として、賈島の出生地が范陽であったことに重大な祕密が隱されているかも知れない。范陽は安史の亂(七五五―六三)の發生地の一つであり、賈島が誕生したのは、亂終息のわずかに十數年後であった。賈島の父祖がもし賊軍に關與していたと假定すれば、父祖に言及しない理由も自ずと明らかである。

(5) 本稿で用いたテキストは以下の各本である。○本事詩……內山知也「本事詩校勘記」(『隋唐小說研究』所收、木耳社、一九七七年一月)、丁福保『歷代詩話讀編』(中華書局、一九八三年八月)所收本。○唐摭言……姜漢椿『唐摭言校注』(上海社會科學院出版社、二〇〇三年一月)。○鑑誡錄……『宋重雕足本鑑誡錄』(上海科學技術出版社、南宋刻本の影印本、二〇〇四年六月)。併せて、四庫全書文淵閣本も參照した。

(6) 齊濤『韋莊詩詞箋注』(山東教育出版社、二〇〇二年六月)「韋莊文輯存」所收。

(7) 『新唐書』では、孟郊以下盧仝までの略傳を載せた後、「時又有賈島・劉叉、皆韓門弟子」と記して、兩者の略傳を載せている。

(8) 『蘇軾文集』卷六七、「書諸集僞謬」(中華書局、一九八八年三月)。

(9) 『才調集』所收の賈島詩七首のうち、四首は通行の別集が收錄し、三首が未收である。無本の詩二首はいずれも賈島の別集に未收である。『才調集』は、傅璇琮編『唐人選唐詩新編』(陝西人民教育出版社、一九九六年七月)所收本を用いた。

(10) 前掲『唐人選唐詩新編』所收『才調集』の「前記」に、「當作於韋穀仕後蜀時」とある(六八七頁)。また、周祖譔主編『中國文學家大辭典・唐五代卷』(中華書局、一九九二年五月)參照。

(11) 二〇〇八年十月に安徽無湖にて開催された「中國唐代文學學會第十四屆年會暨唐代文學國際學術研討會」に提出された論文。

(12) ただし、『才調集』に收める無本が、韓愈が賞贊した人ではなく、別の無本である可能性も少ないながら存在する。すなわち、晚唐の鄭谷(851?—?)と齊己(864—943?)に、それぞれ「無本上人」に贈った詩があり(鄭谷「題無本上人小齋」・「別修覺寺無本上人」(『全』卷六七五)、齊己「贈無本上人」(『全』卷八四〇))、兩者の活躍が賈島の沒後三十年以上經ってからのことである事實を考慮に入れると、彼らが詩を贈った無本も自ずと別人と考えざるを得ない。ちなみに、傅義『鄭谷詩集編年校注』(華東師範大學出版社、一九九三年十二月)によれば、鄭谷の詩は中和三年(883)、蜀の修覺寺にて作られている。蜀で編まれた『才調集』に、晚唐の頃、蜀の寺に住持した僧の作が收められた可能性はけっして小さくない。とはいえ、この晚唐の無本については、他に關連資料がまったくのこっておらず、詩名があったのか否かすらも定かではない。一方、韓愈が送別した范陽の無本は、韓愈に絕贊されるほどの詩才を備えていた。したがって、現存資料の限りでは、『才調集』收錄の無本も、韓愈が賞贊したその人とするのが、もっとも妥當であろう。

(13) 「苦吟派」というのは、もちろん後世の呼稱であるが、賈島自身も自作のなかで「苦吟」する自己を描いている。たとえば、「三月晦日贈劉評事」(『新校』卷十)では、「三月正當三十日、風光別我苦吟身(三月正に三十日に當たり、風光 我が苦吟の身に別る)」と詠じている。なお、集外詩ではあるが、賈島の苦吟を表象する詩句として「二句三年にして得、一吟 雙淚流る(二句三年得、一吟雙淚流)」(『新校』附集、「題詩後」)がしばしば引用される。

(14) 葛兆光『中國宗教與文學論集』(清華大學出版社、一九九八年八月)に、「禪意的〈雲〉…唐詩中一個語詞的分析」という一章があり、中唐以降の詩人が禪意を投影しつつ「雲」を描寫するようになったと指摘している。この指摘を踏まえれば、賈島のこの詩における「雲」にも、禪的境地、ここでは禪僧のイメージが投影されている、と解釋できる。

(15) 李洞の故事は『唐摭言』卷十、「海敍不遇」に、孫晟の故事は『舊五代史』卷一三一(周書二二、列傳一二)および『新五代史』卷三三(死事傳第二一)に見える。

(16) たとえば、岡田充博「中晚唐期に見られる詩文學への沒頭的風潮について—詩人達の文學的自覺の問題を中心として—」(『名古屋大學文學部研究論集』LXXXVI(文學26)、一九八〇年三月)、劉寧『唐宋之際詩歌演變研究』第三章(北京師範大學出版社、二〇〇二年九月)、趙榮蔚『晚唐士風與詩風』(上海古籍出版社、二〇〇四年十二月)、李建崑『中晚唐苦吟詩人研究』(秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇五年七月)等。

(17) 張籍には、次のような賈島に贈った詩がある。「過賈島野居」(『全』卷三八四)、「贈賈島」(『全』卷三八五)、「贈項斯」(一作王建詩、題云「贈賈島」)(『全』卷三八六)、「與賈島閒遊」(『全』卷三八六)、「逢賈島」(『全』卷三八六)。